

ふくしま県人会だより

第52号
令和8年2月
福島県人会
北海道連合会

を開催し現在まで四回開催されています。本年は、福島県が誕生して百五十年、震災・原発事故から十五年という大事な年で弾みがつくと歓迎した記事が掲載されていました。



福島県人会北海道連合会会長

新年あいさつ

福島県人会北海道連合会

会長 渡辺 健治



東日本大震災からまもなく十五年が経ちますが、いまだに復興が道半ばの地域があり、震災の影響が色濃く残る現状に心を痛めずにはいられません。福島県は「ひとつ、ひとつ、実現するふくしま」というスローガンを掲げ、震災と原子力災害から復興を加速させ、人口減少対策を含む福島ならではの地方創生にむけた持続可能な社会の実現に取り組んでいます。

また、福島民友の記事によると海外の福島県人会は百年以上の歴史があり、現在では二十四ヶ国に三十六県人会が組織され母県に関する情報発信の取り組みやネットワークを通じ母県の魅力、風評被害の払拭に努めています。

あけましておめでとうございます。福島県人会北海道連合会会員の皆様におかれましては、健やかに新年をお迎えられたこととお喜び申し上げます。

昨年は第五十三回福島県人会北海道連合会総会が五月三十日に苫小牧で開催され、全道から多くの会員の皆様と母県福島から副知事、議長並びに開催地の市長にもご臨席を賜り盛大に開催できました。

さらには、福島県も英国、米国、ブラジルなどの九か国十九地域の在外福島県人会役員を福島に召集。福島市で、被災地支援の対策会議を行い（在外県人会サミット）「ふるさと福島応援宣言」をまとめ、出席者の賛同を得て、『ワールド福島県人会』を設立。一年おきにサミット

本年から福島県人会北海道連合会総会が輪番制から札幌・千歳県人会に固定して開催される運びとなりました。両県人会会員の皆様に大会運営にご尽力を賜りますようお願い申し上げます。

本年は、連合会事業として第十六回母県訪問を十月から十一月頃に、また四年毎に開催されている第五回全国うつくしま県人会交流会が東京で予定されています。

終わりに、福島県の更なる復興と会員皆様のご支援とご協力を賜りながら、連合会の活動をより一層充実させていく所存です。皆様が健康で笑顔あふれる一年となりますよう、心よりお祈り申し上げ新年の挨拶とさせていただきます。

謹んで新年の御挨拶を申し上げます。

福島県人会北海道連合会におかれましては、昭和四十八年の発足以來、ふるさとを同じくする方々の心のよりどころとして、会員相互の交流を深められておりることは、誠に喜ばしい限りであり、心から敬意を表します。また、会員の皆さんにおかれましては、本県に格別のお力添えを賜りまして、厚く御礼申し上げます。

さて、震災と原発事故から間もなく十五年の節目を迎えるとしております。この間、県民の皆様の懸命な御努力と国内外からの温かい御支援により、福島県は着実に復興への歩みを進めてまいりました。

昨年は、全国新酒鑑評会において、三年振りに金賞受賞数日本一に返り咲いたほか、東京二〇二二五デフリンピックでは、本県復興のシンボルであるJヴィレッジにおいてサッカー競技が開催されるなど、明るい話題が続きました。

福島県知事

新年あいさつ

「共に創る福島の未来」
福島県知事 内堀 雅雄

また、大阪・関西万博などを契機として、本県の復興状況や様々な魅力を国内外に広く発信することができました。

このような中、避難地域では、特定帰還居住区域において、除染等が進められているほか、震災後、五十五の国・地域で行われていた県産農林水産物の輸入規制が五つの国・地域にまで減少するなど、これまで続けてきた挑戦の成果が目に見える形となつて現れております。

一方で、原子力災害に伴う様々な課題に加え、急激に進む人口減少など、いまだ複雑で困難な課題が山積していることから、今後も本県の復興・再生と「福島ならでは」の地方創生の実現に向け、全力で挑戦を続けてまいります。

まず、震災と原発事故からの復興・再生につきましては、令和八年度から第三期復興・創生期間がスタートします。このため、避難者の帰還や生活環境の整備、産業・生業の再生、風評の払拭と風化の防止などに取り組むとともに、復興の進捗に伴つて生じる新たな課題やニーズにもきめ細かく対応してまいります。

また、地方創生、すなわち人口減少対策につきましては、昨年、「ふくしま共創チーム」を設立したとこ

ろであり、オールふくしまで共に考え、共に挑戦することにより、持続可能で豊かなふくしまを目指してまいります。

今年は、福島県が誕生して百五十年という本県にとって非常に重要な年です。

この節目の年に開催する、「ふくしまデステイネーションキャンペーン」や「大ゴッホ展」を通じて、国内外の多くの方に復興が進む「福島の今」と本県の魅力を「見て」「触れて」「感じて」いただけるよう準備を進めてまいります。

今後も、県民の皆様と共に、挑戦を続けてまいりますので、一層の御支援、御協力をお願い申し上げ、新年の御挨拶といたします。

会員通信

県人会にさそわれて

札幌福島県人会
事務次長 武田 道子

私は転勤族の主人と東京・大阪・札幌と転々として二回目の札幌転勤で、平成二十五年に今の札幌福島県人会会長清野さんと同じ時期に民生委員になり、その時に声をかけられて県人会に入会いたしました。

早いものでもう十二年目になります。

最後に皆様の健康をお祈りし、お会いできるのを楽しみにしております。

旭川の親戚？

函館福島県人会

副会長 佐藤 郁夫

明治三十一年、旭川ペーパン地区に福島県伊達郡大田村から百二十八戸が団体入植しました。入植者やその子孫の方々が、ふるさとを想いながら北の大地で力強く生き抜いてきたことを、旭川県人会馬場幸子さんは「県人会だより」で何度も紹介されました。前号（第五十一号）では、「福島踊り保存会」の解散や唯一残っていた小学校の廃校を、名

残惜しさと残念さを込めて書いておられます。

その「大田村」は私の実家旧「栗野村」の南隣。母の実家と父方祖父の実家の村です。「もしかしたら母

（旧姓脇屋）と祖父（旧姓菅野）の親戚がペー・パン地区におられるのでは」と思い、旭川県人会佐藤貞夫会長の手をお借りして、馬場さんに手紙を届けて頂きました。すると、

馬場さんから「よく分からぬ」という返事とともに、①米原瑞穂地区いろいろなフラダンスを披露して、お客様との交流も行っておりました。

その中で「フラガール～虹を～」という曲は私の胸を打ち心にすこく響いて、涙があふれてきたことを今でも思い出します。

少しきめ細かく対応してまいります。

また、地方創生、すなわち人口減少対策につきましては、昨年、「ふくしま共創チーム」を設立したとこ

大田地区出身津田功氏の著書「燃えた『火』が『否』を消し『碑』を立てた」の二冊が届きました。

目を通すと、団体入植に至る経緯（人口増・田畠不足等による生活の困窮）、筆舌に尽くしがたい原始林開拓の苦労、入植者の活躍（開拓地の拡大、養蚕・米作の開始、入植翌年の小学校開校）、百二十八家族の入植事情や家系図などが書いてありました。

肝心の母と祖父の親戚と思われる入植者は見つかりませんでしたが、津田功氏の著書の中に、「驚き」と「もしかしたら」ということを発見しました。

まず「驚き」から。入植者畠金四郎さんを紹介した。ページに金四郎さんの旧宅の写真。見た瞬間、「あつ、子どもの頃何度も泊まつた母の実家だ」。

この家は天保三年（一八三三年）築。金四郎さんが入植する際、台風被害で土蔵暮らし中だった親友脇屋厚太郎（母の祖父）に譲ります。大きな茅葺きの家で、土間が広く、太い梁から囲炉裏にぶら下がつた自在鉤、部屋を仕切る戸板が黒光りしていました。地図を見ながら、「冬は寒くて野菜が取れない北海道旭川に、わが家のホウレンソウが運ばれているんだ」と感動した記憶が残っています。

（もしかしたら）です。祖父の実家があつた大田村尾畠地区か

ら、祖父の親ないしその兄弟と思われる方（菅野市右衛門、善右衛門）も応募しますが、入植しませんでした。しかし、市右衛門宅隣の番地に住んでいた佐藤萬吉さんは入植団に加わり、ペーパンで「萬吉温泉」を経営しています。萬吉家の家系図を見ただけでは、わが佐藤家の親戚かどうかは分かりませんが、萬吉家の家紋が源氏車でお寺が真言宗豊山派なら、親戚の可能性が高まります。もしそうなら、わが佐藤家の事情（娘二人で婿養子が必要だった）を知っていて、婿養子の口利きをしましたかかもしれません。

最後に、私が初めて「旭川」を耳にした思い出です。

実家は農家で、養蚕、桃生産、植木販売などのほか、ホウレンソウなど野菜を農協に出荷していました。小学生のある冬、父はホウレンソウの小束の中に手紙を忍ばせます。しばらくして親戚などいないはずの北海道旭川からの手紙が届きました。「ホウレンソウを美味しく頂きました」といった内容だったと思います。地図を見ながら、「冬は寒くて野菜が取れない北海道旭川に、わが家のホウレンソウが運ばれています」と感動した記憶が残っています。

ふくしま時間旅行

令和七年六月、N H K 福島放送局で福島県内に放送された、福島と北海道とのつながりについての番組がありました。

内容は、四十六年前の昭和五十五年にも放送された、福島から北海道への集団移住の歴史紹介番組で、福島県伊達市に建てられた記念碑、忘れぬ風景、知られざる福島の内容で放送されています。

今から百三十年前にさかのぼりますが、明治三十一年福島県大田村の人たちが北海道旭川市東旭川町に集団移住した歴史です。当時大田村は、年々人口が増加する一方で田畠や仕事が減少していく大変困った状況にあり、そこで村長の菊田熊之助氏が北海道への移住を先導しました。汽車・船と乗り継ぐが当時鉄路は滝川までしかなく、そこから先は一日二十kmの道を歩いた。生まれたばかりの子を抱き家財道具を背負いながらの道のりは想像を絶する困難であった。

そして向かつた先は、旭川市旭山動物園よりもまだ奥地大雪山の麓道

移住した百七十三人の人々は、力を合わせ、原野を切り開き、畑に変えていきました。水害冷害で畑がダメになる年もあり、疲弊した体にむち打つてようやくできたわずかな畑。厳しい開拓当時、村の人々の心を癒したのが、福島踊りでした。被災困ぱいの果てにただ寝るだけの日々、ある集会の夜、誰も語るともなく話しあは故郷のことばかり。丸太をたたき、音頭をとるとその音に人々が集まり踊り明かしたという。

苦労の末、念願だった収穫の様子を表している踊り、福島踊り。それ以来受け継がれてきた踊りがペーパン福島踊りです。

昭和五十五年、一世二世の人が旧保原町（現・福島県伊達市）に里帰りした際、一緒に踊り合わせした時に、音頭振り同じであつたということで、その時の様子が報道されています。

ペーパン福島踊り保存会の皆様には、以前より福島県人会北海道連合総会では、たいへんお世話をなっております。昭和では五十七年・六十三年、平成では六年・十六年・二十五年、令和元年と、旭川担当年度の懇親会を大いに盛り上げていただけきました。連合総会開催時期は毎年五月中下旬です。ペーパン福島踊

り保存会の皆様は農業従事関係者が大半です。超多忙の時に笛・太鼓・衣装を携行して会場まで来ていました。

「支援に誠に感謝いたしております。」

ペーパン福島踊りの唄の内容に、

「山は焼けても山鳥飛ばぬ 飛ばぬはずだよ 我が子が可愛い」があります。

この文言は、民謡・落語・講談・浪曲等多方面の分野でもあります。

徳島県民謡「阿波麦打唄」で唄われて、また、講談浪曲の一説では、感極まり涙ぐむ人もいるそうです。

皆様も、山は焼けても…を考えるよい機会になればと思います。インターネット検索でわかります。

ペーパン福島踊り保存会は、令和七年三月末を以て高齢化により残念ながら解散になりました。

北海道新聞にて、解散報告がありました。会長の三瓶登美治様、事務局長の馬場幸子様以下会員の皆様、全てやり切ったとのことでした。これまでの活動、おつかれさまでした。県人会へのご支援ありがとうございました。

ペーパン福島踊り保存会のこれまでの活動状況は、後世にそしてパン地区で生まれ育つた子供たちの心に生き続けます。

「永倉新人と栗田鉄馬」展

苦小牧福島県人会

角田 博文

札幌市野幌にある「北海道博物館」で「新選組永倉新人と会津藩士栗田鉄馬」の特別展が開催され、興味をそそられた私と家族は、四人で九月十四日に鑑賞してきました。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」とよく言われましたが、新選組も会津藩士も「戊辰戦争」に敗れて「賊軍」とされました。明治維新後、永倉新八も栗田鉄馬も、それぞれ別々に縁あって北海道に渡り「戊辰戦争」後の人生を北海道の発展のために捧げました。

新選組の永倉新八は松前藩士の婿養子となり、主に小樽で過ごしました。

教師として受刑者を指導し、活躍されたことを私は知りませんでしたので驚きでした。一方、会津藩士の栗田鉄馬は、福島の会津藩士として集団で余市町に移住しました。特筆すべきは、余市町に移住した仲間と共に、北海道で最初のリンゴ栽培に精魂を傾け、軌道に乗せました。今では、「美しいフルーツのまち」として有名な余市町の「礎」を築きました。

私の曾祖父も会津藩士の生き残りとして、函館に住まいし、駐在所のお巡りさんをしていました。この特別展から、曾祖父の暮らしぶりや情景がうつすらと思い浮かびました。

特別展は、福島から北海道に渡ってきた人々の気持ちや生活がわかり、興味深く感慨深いもので、感銘を受けて帰つてきました。



【北海道名産「紺衣」のラベル】

福島県からのお知らせ

チカホで茨城県と合同のPRイベントを行いました

令和七年十二月十日（水曜日）十一日（木曜日）まで、札幌駅前通地下歩行空間（チカホ）にて、茨城・福島PR展を開催しました。

本県は、旬の最盛期を迎えたばかりのサンふじや出荷が始まつたばかりのあんぽ柿（蜂屋柿）を始めとする農産物、福島の銘菓や果汁百分の桃ジュースなどの県産品の販売や、人気酒造株式会社の出展による県産酒の販売を行いました。

茨城県は、特産品の蓮根や干し芋の販売のほか、さつまいもの詰め放題などを行い、多くの来場者でにぎわいました。



【福島県の販売ブースの様子】

チカホで福島県産あんぽ柿のPRイベントを行いました



【茨城県の販売ブースの様子】



【あんぽ柿の販売開始を待つお客様】

十二月の茨城県との合同PRイベントに続き、札幌市内において、福島県産あんぽ柿（蜂屋柿）のPR販売のイベントを二つ行いました。PRには、昨年も大好評だった、あんぽ柿発祥の地・五十沢地区で作られたあんぽ柿を準備しました。

一つ目のイベントは、令和八年一月二十日（火）から二十一日（水）までの二日間、セイコーマート北海道店（北海道厅地下一階）にてあんぽ柿の販売を実施しました。両日とも、昨年に引き続き大盛況となりました。

二つ目のイベントは、令和八年一月二十二日（木）に、札幌駅前通地下歩行空間（チカホ）にて実施しました。メインのあんぽ柿の他にも、福島銘菓の薄皮饅頭や「いかにんじん」、赤べこ関連商品なども販売しました。

また、この日も人気酒造株式会社による県産日本酒の販売も行われ、訪れた多くのお客様から好評をいただきました。



【販売開始前の様子】



【あんぽ柿や福島県の銘菓などが並ぶ】

今回の札幌雪まつりでは、会津若松市の名城「鶴ヶ城」を再現した高さ約十五メートルに及ぶ大雪像が登場しました。鶴ヶ城大雪像の制作は二〇一二年以来二回目となり、令和七年に天守閣再建六十周年を迎えたことを記念して出展されたものです。

会場は大通会場八丁目「雪のHTB広場」。制作は北海道テレビ放送（HTB）と陸上自衛隊第十八普通科連隊が共同で行い、延べ約三八〇〇人が約一ヶ月をかけて、城郭の細部に至るまで忠実に再現しました。雪をブロック状に加工し、細かなパーツを一つひとつ貼り付ける「アイスブロック工法」と呼ばれる独自の技術により、石垣や屋根、天守の構造美が精巧に表現されています。鶴ヶ城は、至徳元年（一二三八年）に葦名直盛が築いた東黒川館を起源とし、文禄二年（一五九三年）に蒲生氏郷が東日本で初の本格的な天守閣を建て、「鶴ヶ城」と命名しました。幕末の戊辰戦争では、新政府軍の激しい攻撃に約一ヶ月耐え抜き、難攻不落の名城としてその名を全国に知られることとなりまし

札幌雪まつりで鶴ヶ城の大雪像が作成されました

今回、札幌雪まつりでは、会津若松市の名城「鶴ヶ城」を再現した高さ約十五メートルに及ぶ大雪像が登場しました。鶴ヶ城大雪像の制作は二〇一二年以来二回目となり、令和七年に天守閣再建六十周年を迎えたことを記念して出展されたものです。

た。

明治七年（一八七四年）までに城の建物はすべて取り壊されました。が、昭和四十年（一九六五年）に天守閣が再建され、平成二十三年（二〇一一年）には屋根瓦が幕末当時の赤瓦にふき替えられました。現在では、日本に現存する城郭の中で唯一、赤瓦の天守閣を持つ城としても知られています。



【オープニングセレモニーで挨拶する室井市長】



【鶴ヶ城】



【県人会を表敬訪問された室井市長（右から2番目）】



【ふくしまDCのお知らせはこちら！】

二月四日（水曜日）に大通会場八丁目で行われたオープニングセレモニーには、札幌市の秋元市長、H

TBの寺内社長、陸上自衛隊第十八普通科連隊の大濱連隊長、会津若松市から室井照平市長、清川雅史市議会議長が出席されました。

会津若松市の室井市長が 県人会を表敬訪問されました

ふくしまデステイネーション
キャンペーンが開催されます

令和八年二月四日、札幌雪まつりの鶴ヶ城大雪像出展に合わせて、会津若松市の室井照平市長が福島県人会北海道連合会および札幌福島県人会を表敬訪問されました。

連合会からは渡辺会長、札幌県人会からは清野会長が出席し、市長との挨拶の後、懇談を行いました。

懇談の中では、福島と北海道の歴史的なつながりや、道内に暮らす福島県関係者の活動が両地域の交流を支えてきたことについて意見が交わされました。

福島県では二〇二六年四月から六月に、JRグループと連携した国内最大級の観光キャンペーン「ふくしまデステイネーションキャンペーン」（ふくしまDC）が開催されます。期間中には、福島県・市町村・地元の観光事業者などが一体となって各地域の魅力を活かした様々な企画をご用意しております。

今年は福島県政百五十周年、東日本大震災から十五年の節目の年となります。この機会にぜひ福島へお越しください！